

命と生活を守るための「痛みを伴う貴重な教訓」がここに

著者は福島、能登を訪れ、被災した人々と真摯に向き合い、取材を続けるジャーナリスト・藍原寛子さん。

本書では、『婦人之友』連載の「10年後のフクシマ」で取材した人々を再訪し、現在も続く厳しい状況やふり返って今思うこと、これからも伝え続けていきたいことなどについて、あらためてお話をうかがっています。また、2024年の能登半島地震後、現地に足を運び、被災した人々が何を考えて、どう行動しているのか取材したルポも掲載。厳しい現実に向き合い、闘いを続けている人たちの言葉は、私たちの漠然とした不安を消し去り、災害大国で生きる勇気を与えてくれるはずです。



フクシマを能登を
私たちの今として捉える。
未来に希望をつなぐために。
窓辺に差し込む光のように、
人を目覚めさせる1冊。

—— あさのあつこ (作家)



作家・高村薫さんとの対談「未知を生きて 原発を抱えた国で」も再録。

目次より

- 震災後を生きる人々をつなぐ映画館
「フォーラム福島」総支配人 阿部康宏
- 子どもを被ばくから守りたい
福島の子ども支援 水戸喜世子
- 原発を問うた詩人
詩人 若松丈太郎
- 平和と震災を語る講談師
講談師 神田香織
- 伝統の漁とウェットスーツ
海女 早瀬千春
- 原発がなくても暮らせる能登を
元珠洲市議 北野 進

ほか (敬称略)

何かに行き詰まった時、
未来が見えなくて落ち込んだ時、
本書のフクシマと能登の人々の言葉を思い出して
みてください。
それらは暗闇の中にあっても、
絶え間なく灯り続けるたいまつとなって、
私たちの人生の行く先を
照らしてくれるはずです。

—— おわりにより

3月5日発売の書籍と合わせて、
著者インタビューもご覧ください

本書執筆への想い、震災大国で生きる私たちが災害にどう向き合えばいいか？
さらに人と人とのつながりが、なぜ大切なのか、語ってもらいました。

